

# 井原西鶴における『徒然草』の感得：『日本永代蔵』の場合

著者名(日)	長澤 麻衣子
雑誌名	大妻国文
巻	44
ページ	69-89
発行年	2013-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00005656/">http://id.nii.ac.jp/1114/00005656/</a>

## 井原西鶴における『徒然草』の感得

——『日本永代蔵』の場合——

長 澤 麻 衣 子

### 一 はじめに

本考察を行うにあたり『日本永代蔵』の簡単な書誌と概要を提示する（以下、『日本永代蔵』を『永代蔵』と略記する）。刊行は、貞享五年（一六八八）正月。大本六卷六冊。挿絵は、吉田半兵衛風。各卷五章六卷三十章よりなる。卷一のみに内題「本朝永代蔵」。傍題と柱に「大福新長者教」。いわゆる西鶴本の中で、最も多くの伝本を今日に伝存している作品が『永代蔵』である。それゆえにまた、その版種も一番多いようである。諸本は、二系統十種類に分類することができる。<sup>①</sup>次に概要は、京・大坂・江戸を中心には羽前酒田から南は豊後府内に及ぶ諸都市の町人の興亡盛衰談を集めたものである。寛永四年（一六二七）に『長者教』という町人致富の要諦を説いた僅か十数葉の小冊子が大流行した。それに倣う数々の試みの成果も乏しい後を承けて、目敏い書肆森田庄太郎によって西鶴に詠えたのが本書であろう。「大福新長者教」という副題には、儲け主義に徹した教訓的な言辞が随所に見られ、書肆の意欲が読みとれる。後年の『大福新長者鑑』への改題もそこに繋がる。耳遠い『永代蔵』を主題にすえたところに、作者の意図がうかがえる。以上のように『永代蔵』

は長く版を重ねるほど人気のあった作品であること、さらに、『長者教』の影響を受けた長者になるための指針を小説化したものである、というものが従来の説である。

しかし、『永代蔵』は最も人気の作品とされながら、同時にいくつかの解決されない問題をはらんだ作品でもある。そのひとつに主題の問題がある。三十章の内容を分析するとき、特定の主題を設定して解釈すると、必ずその枠に収まらない例外章段が存在してしまう。つまり、いまだ確固とした主題が研究によって定められていないことになる。

本稿では本作品の主題を探るために、『永代蔵』における『徒然草』の受容と内容反映の具体例を示すことで、近世前期の『徒然草』解釈の背景を通して、西鶴が感得したであろう『徒然草』の思想を吟味し、『徒然草』影響箇所をどのように『永代蔵』へ反映させているかの考察を試みるものである。

## 二 『永代蔵』における『徒然草』の受容

近世における『徒然草』の受容史を通して、西鶴や『永代蔵』において『徒然草』は看過することのできない作品であることを確認してみたいと思う。

### (1) 先行研究

『徒然草』に関する同時代の主要思想と流れは、『徒然草』が近世初頭以来、数多くの本文・注釈書の出刊によって幅広く読まれ、多くの影響を近世文芸に与えたことは周知である。『徒然草』の受容史の先行研究論文の中から、中村幸彦氏『徒然草受容史』<sup>(2)</sup>を以下に抜粋する。

徒然草が人間味の濃い享樂的人生觀と、求道的な趣味觀、魔界即仏界の如く相反する二面をもつて、近世初期人士の

共鳴を得た。(中略) 仏理で全篇を説く人のある如く中世的に道念的でもあり、儒理をこれに代える人もある如く近世的に人間的であることが、この過渡期の多くの精神を吸引したのであった。

他にも、関場武氏<sup>(3)</sup>、檜谷昭彦氏<sup>(4)</sup>、島内裕子氏<sup>(5)</sup>等の論述がある。

以上の先行研究により、近世初頭に慶長の文化人達によって、『徒然草』は関心の的となり、談理の書から文学創作の手本となり、様式と文章の模倣となるまで広まったことが推測される。

## (2) 西鶴作品と『徒然草』の係わりにおける先行研究

西鶴がどのような背景で『徒然草』の影響を受けたかを確認する。西鶴作品と『徒然草』の関係については、先行論述がすでに存在する。代表として、吉江久弥氏「西鶴と『徒然草』——「日本永代蔵」の性格をめぐって」を以下に抜粋する。世の人心を描こうとした町人物、ひいては「置土産」の世界に至るまでの彼の全作品の観察の方法や対象、あるいはそれに関係する説話の俳諧的な語り口までが、むしろ「徒然草」を通して体得したものではなかったろうかと思われる。

他にも西鶴の俳諧における『徒然草』の享受について述べた佐伯友紀子氏<sup>(7)</sup>。西鶴作品と『徒然草』について述べた広嶋進氏<sup>(8)</sup>。また、特に西鶴町人物に焦点を絞ったものでは、谷協理史氏<sup>(9)</sup>などさまざまな視点で西鶴作品と『徒然草』の関連論文がある。しかし、吉江久弥氏以外は、『永代蔵』単独で『徒然草』との関連について考察する論文はないに等しい。さらに、吉江氏も『永代蔵』において、『徒然草』の存在と主題の関係にまでは言及をしていないと思われる。

## (3) 『永代蔵』の副題「大福新長者教」の解釈

『永代蔵』は副題が「大福新長者教」となっていることから、「長者教」の語に注目して『長者教』の影響を受けたも

のであることが従来から定説となつて<sup>(10)</sup>いる。野間光辰氏「『長者教』考」<sup>(11)</sup>にもあるように、『長者教』と『徒然草』には深い繋がりがある。前述した『徒然草』受容史の流れの中で、『徒然草』の注釈書が教訓書へと変容した作品のひとつとして、『長者教』の成立も含まれているとされている。そのような背景を考慮すると、『永代蔵』副題の「大福」または「大福長者」は、『徒然草』第二一七段の「或大福長者のいはく」を連想することができる。『永代蔵』刊行当時、金銀の儲け指南書、教訓書に対する関心と需要の高さを勘案すると、『新長者教』の「長者教」の意味は、『長者教』単体の書を指示するのではなく、『金銀万能丸』を含めた多数の長者教訓書を総称して「長者教」と名付けた可能性もあり得るのである。さらに、『永代蔵』巻六の五にも「金銀ある所にはある物がたり、聞き伝へて日本大福帳にしるし、末久しくこれを見る人のためにもなりぬべし」とあることから「大福新長者教」は「大福長者の教え」「大福帳」「長者教」「長者の教え」と多数の意味が含まれていることが推測される。

また「新大福長者教」ではなく、「大福新長者教」であるところに注目すると、「新」の文字が「大福」と「長者教」の間に位置することで、『徒然草』の大福長者の教えや長者教訓書の教えとは異なる新しい教え」と解釈することも可能である。『二十四孝』に対する『本朝二十不孝』や『可笑記』に対する『新可笑記』といった、表題を一見しただけで対比の作品が容易に想像される書とは異なる書といえる。ただし、一見しただけではわかりにくい表題も、深い意味があったからこそ、西鶴は『永代蔵』の副題に「大福新長者教」と命名したのではないかと考えるのである。

以上、西鶴が『永代蔵』執筆当時に『徒然草』の影響をどのような背景で受けたかを推測してみた。『徒然草』は金儲け教訓書ではない。『永代蔵』は、随想・随筆である『徒然草』や『長者教』をいかに享受し、どのように変化するのか。これまで光が当てられることのなかった、「大福長者の教え」を包含する『徒然草』と『徒然草』から発展した数多くの「長者教訓書」を新たに発展させて、『永代蔵』が金銀の儲け指南書、教訓書とは異なる内容の書である具体例を以下の次章で試みるものである。

### 三 『永代蔵』における『徒然草』内容反映の具体例

西鶴は『永代蔵』を通して、『徒然草』の大福長者の教訓にどのように傾倒しているか。『永代蔵』が『徒然草』の何を継承したものであるかを探るために、『徒然草』と『永代蔵』の関連を以下(1)から(4)において具体例を挙げて考察する。前章で述べたとおり、『永代蔵』は副題と柱に「大福新長者教」と記している。そして「大福長者」の語から、『徒然草』第二二七段「或大福長者のいはく」を連想することができる。以下に『徒然草』第二二七段本文を掲載する。<sup>(12)</sup>

#### 『徒然草』第二二七段

或大福長者のいはく。「人はよろつをさしをきて、ひたふるに徳をつくべきなり。まづしくはいけるかひなし。とめるのみを人とす。徳をつかんと思は、。すべからく、まづ其心づかひを修行すへし。其心と云は。他の事にあらす。人間常住の思ひに住して、かりにも無常を觀ずることなかれ。是第一の用心なり。次に万事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に随てこゝろさしをとげんと思は、百万の錢ありといふとも。しはらくも住すへからず。所願は止む時なし。財はつくる期あり。かぎりある財をもちて。かきりなき願にしたかふ事、うべからず。所願心にきざすことあらば、われをほろぼすへき惡念きたれりと。かたくつゝしみをそれて。小要をもなすへからず。次に、錢をやつこのことくして。つかひもちある物としらは、ながく貧苦をまぬかるへからず。君のことく、神のことくをそれたうとみて。したかへもちいることなかれ。次に、はぢにのそむといふとも。いかりうらむることなかれ。次に、正直にして約をかたくすへし。此義をまはりて利をもとめん人は。富の来る事、火のかはけるにつき。水のくだれるにしたかふことくなるへし。錢つもりてつきさるときは、宴飲声色をことゝせず。居所をかさらず。所願をなさざれども。こゝろとしなへにやすくだのし」と申き。

抑人は、所願を成ぜんがために。財をもとむ。錢を財とする事は、ねかひをかなふるかゆへなり。所願あれともかなへず。錢あれともちゐさらんは。全く貧者とおなじ。何をかたのしひとせん。此をきては、たゝ人間ののそみをたちて。貧をうれふへからすときこえたり。欲を成じてたのしひとせんよりは。しかじ、財なからんには。癰疽をやむ者。水にあらひてたのしひとせんよりは。やまざらんにはしかし。こゝに至りては。貧富わく所なし。究竟は理即にひとし。大欲は無欲に似たり。

# (1) 近世の『徒然草』注釈書の内容比較

この段の究極は本文傍線部bの「抑人は、所願を成ぜんがために……」に続く「大欲は無欲に似たり」に集約することになるのだが、その前に大部分を占める大福長者の五箇条(本文傍線部AからE)を以下にAからEとして挙げる。同時に近世前期の『徒然草』注釈書として、秦宗巴著『徒然草寿命院抄(以下・寿)』(慶長六年奥書)<sup>(13)</sup>、林羅山著『桮槌(以下・桮)』(元和七年)<sup>(14)</sup>、松永貞徳著『なくさみ草(以下・慰)』(慶安五年自跋)<sup>(15)</sup>、北村季吟著『徒然草文段抄(以下・文)』(寛文七年刊)<sup>(16)</sup>、山岡元隣著『増補鉄槌(以下・鉄)』(寛文九年刊)<sup>(17)</sup>を代表として比較し、さらに『永代蔵』の本文内容が対応する項目も記載することで、『永代蔵』刊行当時に『徒然草』がどのように解釈されているのかを確認する。

A. 人間常住の思ひに住して、かりにも無常を觀することなかれ

『徒然草』の意味は、<sup>(18)</sup>「世間はいつまでも変わりが無いという考えに踏みとどまって、かりそめにも、世間の無常であることを明らかに觀察してはならない」とある。世の中が無常であることを心に思うと、財宝をもつことに意味をもてなくなってしまうので、いけないということである。物事や人に【執着心】を持つことを勧めている。

寿・桮・慰は該当項目なし。

文. 「人間常住の思に住して <sup>(19)</sup>人間は死なざる物とおもひつめてとの心なり住しては其覺悟にとゞまる義也。無常を

観ずれば無欲になる間。利徳をつくべきやうなれば也」

鉄 「人間常住の思ひに住して 人間はしなざるにいつもあるとおもひつめよとの心也」

「かりにも無常を観する事なかれ 万事死すればいらぬ物なりとおもへば無欲になりてあしきといふ心也」

『永代蔵』<sup>(19)</sup>では、「ひとつの家業に従事して一途に励む」という項目があてはまる。代表的な例では、巻四の三「其道々をしる事人の肝心なり」「人はしつけたる道を一筋に覺てよしとぞ」などが挙げられる。注釈書と『永代蔵』の違いは、『徒然草』の本文の解釈に留まつているものか、その解釈から現実の現象にたとえてわかりやすい状況描写をしているかの差である。

B. 万事の用をかなふべからず（中略）かぎりある財をもちて。かきりなき願にしたかふ事、うべからず（中略）小要をもなすへからず

『徒然草』の意味は、「万事の用事を思い通りに果たしてはならない」である。「用」は「したいこと」を意味する。人間の欲望は無限で、叶えることなど到底不可能であるから、心を律して【質素儉約】に励むことを勧めている。欲望は無限（かきりなき願）であり、財は有限（かぎりある財）であると対置している。

寿 「限アル財ヲモチテ 通監汝以有限之財与以不可成之」

堇 「限ある財をもちて 莊子養生主。吾生也有涯。而知也無涯。以有涯。随無涯。殆已。此語勢に似たり」

慰 該当項目なし。

文 「自他につけて 我用につけ。人の用につけて所願おほきとなり」

「欲にしたがひて 欲はほしくおもふ心。所願はねがふ所なり欲も所願もおなじ義なれば。こゝに所願無量なりといふ詞をうけて。其欲にしたがひてとかけり」

「限ある財をもちて 史記蘇秦傳云。且大王之地有盡。而秦之求無已。以有盡之地。而逆無已之求。」



此所謂市<sup>レ</sup>怨結<sup>ヲ</sup>禍者也 又虞鄉傳にも此語意あり。(以下「徒然草寿命院抄」の「通監」、「桮榼」の「莊子養生主」を引用)

「我をほろぼすべき惡念 貧になるはほろぶる心也。前にまづしくはいけるかひなしといへる首尾なり」

鉄 「欲にしたがひて 所願も欲もおなし事なれば所願をいふをうけて欲とかけり」

「かきりある財をもちて (以下「徒然草文段抄」の「史記蘇秦傳」「通鑑」「莊子養生主」を引用)

「我をほろぼすへき惡念 貧になるは亡るなり前にまづしくはいけるかひなしといへる首尾なり」

「小要をもなすへからす 小の要用も錢を遣へからす也」

『永代蔵』では、「分際相應」という項目があてはまる。代表的な例では、卷一の四「諸事其分際よりは華麗を好み殊に妻子の衣服また上もなき事共身の程しらず冥加をそろしき」や卷一の五「分際より万事を華麗にするを近年の人心よろしからず」が挙げられる。「分際相應」の重要性については、『徒然草』第一三一段でも「分を知らずして強いて励むは、己れが誤りなり。貧しくて分を知らざれば盗み、力衰へて分を知らざれば病を受く」と語られている。西鶴は『永代蔵』に限らず、さまざまな作品中で華美になりすぎた町人の風情を憂える描写をしている。西鶴自身の思想背景に『徒然草』第一三一段と共感するものが存在したと考えられる。ここでも注釈書等とは異なり、「分際相應」がいかに大切で、分を弁えない事がいかに愚かしいかを西鶴が実際に見ている「世の風儀」を諷刺描写することによって表現している。

C. 錢を(中略)君のごとく、神のごとく畏れ尊みて、従へもちゐることなかれ

『徒然草』の意味は、「錢を主君のように、神様のように、もったいないと思い、尊敬して、自分に服従させてはならない」である。【儉約】に励むことを勧めている。「B. 万事の用をかなふべからず」との違いは、おのれの心の弱さにうち勝って質素を貫くことではなく、持っている錢を敬うように保持し続ける信心ともいえる執着心である。

寿. 該当項目なし。

楚「君のことく神のことく

晉魯褒錢神論曰。

親愛

如兄。

字

曰孔方。

失

之則貧弱。

得之則

富強。

無翼而飛。

無足而走。

解嚴毅之顏。

一開難發之口。

錢多者處前。

錢少者居後。

云云。

當時賄

賂の道。さかりに行ければ。魯褒いきとほりて。

錢神論をつくりて譏刺せり。兼好も此論のこゝろを以て。か

きたる所あり。」

慰・文・鉄「君のことく、神のことく（以下『楚榼』同様「晉魯褒錢神論」を引用）」

『永代蔵』では、「錢の溜め方に関する始末」という項目があてはまる。代表的な例では、卷三の一「人の大事にかくる物はおとさず錢を乞文いかなく目に角立ても拾ひがたし。是を思ふに佩につかふべき物にはあらず」が挙げられる。

D. 恥に臨むといふとも、怒り恨むる事なかれ

『徒然草』の意味は、「恥ずかしい目にあつても、怒ったり、恨んだりしてはならない」である。これも【儉約】に励むことを勧めている。錢を溜めるために守ることから、始末を笑われることを気にしないことだけではなく、流行や人目を気にして、無駄に金銀を使わないようにということである。必要最低限の身なりで十分であるといっている。

寿・楚・慰は該当項目なし。

文「恥にのぞむとも 恥をすれば金銀をつかふ物なる間。恥しらずになれとの心也」

鉄「恥にのぞむとも 恥をすれば金銀をつかふものなれはかくいふ也」

『永代蔵』では、「身なりの質素さ」という項目があてはまる。代表的な例では、卷一の五「世の外聞ばかりにをくりむかひの駕籠一門縁者の奢くらべ無用の物入かさなりて。程なく穴のあく屋ねをも薺ず家の破滅とはなれり」が挙げられる。見栄のために金銀を浪費しないという意味では、「B. 万事の用をかなふべからず」に近いことができる。

E. 正直にして約を固くすべし

『徒然草』の意味は、「うそいつわりなく、約束を嚴重に守らなくてはならない」である。正直であるだけではなく、約

束を必ず守り、人を欺くこともしないことを指す。これは【正直に生きること】を勧めている。

寿・塾・慰は該当項目なし。

文 「正直にして約をかたくすべし 商人なども正直ならねは得意をうしなふといへり。約束かたき心にては。心よはく事うけなどする事なく。はじめよりいなといひてやむ故也。畢竟心を固く吝にもてとの義也」

鉄 「正直にして約をかたくすへし 以下『徒然草文段抄』と同じ」

『永代藏』では、正直に誠意をこめた人格者こそ金銀を溜めるにふさわしいとしている。代表的な例では、巻四の二「人をぬく事は跡つゝかず正直なれば神明も頭に宿り貞簾なれば仏陀も心を照す」が当てはまる。巻三の四の「伊豆屋」や巻四の三「小橋の利助」の挿話なども含まれる。西鶴作品で「正直さ」は人間としての徳が高く神に祝福され、金銀も自然と集まるとする思想が見受けられる。『永代藏』に限らず「正直さ」の重要性は他作品でもよく表現されている。

以上、『徒然草』第二二七段の大福長者の五箇条について、近世の代表的な『徒然草』注釈書を列挙して較べた。『徒然草寿命院抄』『塾槌』『なくさみ草』と『徒然草文段抄』『増補鉄槌』の間では、注釈の内容に差異が生じていることがうかがえる。これは『徒然草文段抄』序文からも推察することができる。以下はその抜粋である。

『徒然草文段抄』序文（一部抜粋）

凡此双紙の段々に又こまかに文段をわかつて或は六節。或は三節などしるせる事はいまだ先達の説をも承らす偏に愚意にまかせて其憚なきにしもあらねどた、段々の本意をよく明め且初心の見やすからん為也。猶あやまりもおほかるべけれどしはらくわからず試てすなはち此抄の名にも用侍り

季吟は従来の章段区分だけではなく、さらに細分化することによって、初心者にもわかりやすく、また段の内容もよくわかると述べている。そしてこのように節まで分けたのは、自分の独創であるとしている。高い身分や知識階層に講釈される題材の『徒然草』が、季吟などによりさらに広い層に認知されるべく解釈に工夫を凝らされた経緯がうかがえる。さ

らにもう一つ、『なくさみ草』『徒然草文段抄』『増補鉄槌』に記載されている『徒然草』第二二七段の大意を掲載する。

『なくさみ草』大意（一部抜粋）

此大福長者かいひし事、実もおもひて、小気なるもの天下にみてり。（中略）兼好も浄土宗の儀をは所々にほめられしか、禪教の事をはつゐにかゝれす。此段の天台の六即をあけられしは、禪宗の一空を正法にあらずといふ下心と見え侍る。

『徒然草文段抄』大意

此段は大福長者が詞を評判して。畢竟福者も貧者もおなじ理なれば。福者のごとく欲をなしたのしみとせんより。たゞ清貧<sup>ヤイシン</sup>にてたのしまんにはしかじとの心をいへり。前の當段に。儉約<sup>ケンヤク</sup>をほめてかきぬるは。無欲<sup>ムヨク</sup>にして儉約なる人を云也。彼大欲人の。千金万金をもてりといへども。おしむが故に儉約なるたぐひをいふにはあらず。其たぐひの人は。前段をきゝて。いよく儉約とて。所願もかなへず。錢あれ共用ひさらん。若さやうのついであるべき事をおもひて。此段に。かく欲をなして楽とせんよりは財なからんにはしかしとかけるなるべし

『増補鉄槌』大意

此段は大福長者か詞をまうけてかく有て身心をくるしみて金銀をたくはへんは貧者とおなしきといふ心を論したり季吟説に前の當段に儉約をほめて書ぬるは（以下『徒然草文段抄』大意を引用している）

これらの大意を見比べてみても、『なくさみ草』『徒然草文段抄』『増補鉄槌』の立場は、『永代蔵』と異なることがわかる。貞徳は宗教の概念に結びつけて解釈し、季吟と元隣は、大福長者の五箇条よりも兼好の思想に注目している。西鶴は『永代蔵』のなかで、大福長者の五箇条を教訓としてひとまず取り込んでいる。金儲けや金銀に執着することの顛末は物語の展開の見せ所でもあるので、大福長者の五箇条の善惡についても直接判断していない。最終的に人間がどのような感じ、動くのかに目配りしている。西鶴は季吟とは異なった切り口や手法で、独自の『徒然草』解釈を試みた可能性がある

のではなからうか。本文の解釈を提示しているに過ぎない解説本から、西鶴は世の風俗・生活描写を併せることで、臨場感とわかりやすさ、ひいては読者の懐に入り、感性に浸透しやすい物語へと変化させたのではないかと考える。

## (2) 『永代蔵』と第二二七段の内容比較

西鶴は『徒然草』第二二七段に対してどのように感じていたのか。西鶴は『徒然草』第二二七段に対して、単に本文注釈の提示を目的としていないと考える。以下に『徒然草』第二二七段の影響が見られる『永代蔵』の該当章段を挙げる。

『永代蔵』巻一の一「初午は乗て来る仕合」

始末大明神の御託宣にまかせ金銀を溜へし。是二親の外に命の親なり。人間長くみれば朝をしらず短くおもへば夕におどろく。されば天地は万物の逆旅光陰は百代の過客浮世は夢睨といふ。時の間の煙死すれば何ぞ金銀瓦石にはおとれり。黄泉の用には立がたし。然りといへとも残して子孫のためとはなりぬ。ひそかに思ふに世に有程の願ひ何によらず銀徳にて叶はざる事天が下に五つ有。それより外はなかりき。是にましたる寶船の有べきや。(中略)手遠きねがひを捨て近道にそれくの家職を上げむべし。福德は其身の堅固に有。朝夕油断する事なかれ。殊更世の仁義を本として神仏をまつるべし。

右『永代蔵』巻一の本文より、『徒然草』第二二七段と共通する項目を以下①から④に列挙する。

### ① 『永代蔵』傍線部ア「金銀を溜へし」

『徒然草』第二二七段では、以下が大福長者の五箇条の項目に該当する。

「B. 万事の用をかなふべからず(以下略)」

「C. 錢を(中略)君のごとく、神のごとく畏れ尊みて、従へもちゐることなかれ」

「D. 恥に臨むといふとも、怒り恨むる事なかれ」

②『永代蔵』傍線部イ「二親をやの外ほかに命いのちの親をやなり」

『徒然草』第二二七段の大福長者の五箇条に、「人は万をさしおきて、ひたふるに徳をつくべきなり。貧しくてはいけるかひなし。富めるのみを人とす（前記引用文傍線部a）」と命と金銀の重要性は同列であると述べている。

③『永代蔵』傍線部ウ「人間げな長くみれば朝あしたをしらず短くおもへば夕ゆふべにおどろく。（中略）然りといへとも残のこして子孫しそんのためとはなりぬ。ひそかに思ふに世よに有程あるほどの願ねがひ何なにによらず銀徳ぎんとくにて叶かなはざる事天あめが下したに五つ有。それより外ほかはなかりき。是これにましたる寶船たからぶねの有べきや」

死んでもつていけるものでもない金銀に執着することは意味がないと断っておきながら、「然りといへとも」「ひそかに思ふに」と本音と建前を巧みに用いて世の中の道理や心情を語っている。背に腹は代えられない現在に重点を置いている。『徒然草』第二二七段では、「A. 人間常住の思ひに住して、かりにも無常を觀することなかれ」に該当する。

④『永代蔵』傍線部エ「手速てときねがひを捨て近道ちかみちにそれ／＼の家職かしょくを上げむべし」

「ひとつの家業に従事して一途に励む」ということで『徒然草』第二二七段の「A. 人間常住の思ひに住して、かりにも無常を觀することなかれ」に相当する。

以上『永代蔵』巻一の一の当該箇所は、『古文真宝後集』を巧みに引用した文章と従来解説されてきた部分であるが、<sup>(20)</sup>『徒然草』第二二七段の大福長者の五箇条とも重なることがうかがえる。単に『徒然草』第二二七段の原文を引用等せず、直接的には『古文真宝後集』を参考にすることで、『徒然草』第二二七段の存在をあえて見え難くしている。その代わりに、「金銀は命と同等」とする衝撃的な意見を明言している。この極論を生む動機が『徒然草』第二二七段であり、西鶴の『永代蔵』執筆を促進させたものではないのであろうか。単に「始末をして溜めよ」「私欲を我慢して金銀支出を抑えよ」の文言では、一方的な教訓でしかないが、「A. 人間常住の思ひに住して、かりにも無常を觀することなかれ」に接することで、寿命と金銀必然の現実を思い知ったのではなからうか。さらに、『徒然草』一〇八段「寸陰スズメおしむ人な

し。これよくしれるか愚<sup>オロカ</sup>なるか。愚にしてをこたる人のためにいは、一銭かろしといへとも。これをかさぬれば。まづしき人をとめる人となす。<sup>①</sup>されは商人の。一銭をおしむ心切也。利那<sup>リナ</sup>。覚えすといへとも。是をはこびてやまざれば。命を終る期たちまちに至る」も、時間と金銀（傍線部a②bを中心に）を同列に扱っている。西鶴が限りある時間を命と捉え、その限りある中で金銀がいかに必要であるかを認識したと解釈する。西鶴は『本朝二十不孝』（貞享三年刊）において、卷二の四「地獄極楽の道も銭ぞかし」という認識を持っていた。その頃から既に『徒然草』に接していた可能性は充分に考えられる。『徒然草』第一四〇段には、「身死て財残る事は。智者のせさる處なり。よからぬ物。たくはへをきたるもつたなく。よきものは。こゝろをとめけんとはかなし。こちたくおほかる。ましてくちおし。我こそえめなといふもの共有て。跡にあらそひたるさまあし。後はたれにと心さすものあらは。いけらんうちにそゆつるへき」がある。この章段からも『永代蔵』卷一の一「然<sup>しか</sup>りといへとも残<sup>ぞ</sup>して子孫<sup>しん</sup>のためとはなりぬ」とは対極の見苦しい遺産争いが『本朝二十不孝』の例であるが卷二の四に顕著に見られる。これらの経緯を経て着想する契機を得たのではないかと推察する。

以上見てきたように、西鶴が『徒然草』第二二七段に対して、単に本文の注釈を目的とはしていない根拠として、大福長者の五箇条を章段ひとつに収めながら、物語の中に一般生活に密着した現実を取り込んだと推測される事例を考察した。注釈でも堅苦しい教訓でもない、西鶴における『徒然草』の新たな解釈と利用法について、以下次項にて考察する。

### (3) 健康に関する『徒然草』第二二三段と『永代蔵』

『徒然草』第二二七段で大福長者の五箇条について、兼好は「此をきては、たゝ人間ののそみをたちて。貧をうれふへからずときこえたり。欲を成じてたのしひとせんよりは。しかじ、財なからんには（前記引用文傍線部d）」と述べている。しかし、『永代蔵』において『徒然草』第二二七段については、兼好の意見よりも大福長者の五箇条に近い考えを取り入れているようにみえる。始末・儉約によって成功した卷二の二「藤市」や卷四の五「樋口屋」など、大福長者の五箇

条を守って蓄財に励み、長者になった例がいくつか存在する故である。『徒然草』は、儉約について嫌っていたわけではない。むしろ始末・儉約を推奨している。儉約は人の道であるとして、二段、一八段、一七一段、一八四段、二一五段などがある。「ものを得るために存在する金銀を、溜めるだけで使ってはいけない」とする大福長者の五箇条を非合理として退け、蓄財については、「人は、所願を成せんがために。財をもとむ。錢を財とする事は、ねかひをかなふるかゆへなり（前記引用文傍線部b）」と意見しているのである。

翻って、『徒然草』の中で兼好が考える富についての項目が、第二二三段にある。以下はその該当本文である。

#### 『徒然草』第二二三段

無益のことをなして時を移すを、愚かなる人とも、僻事する人とも言ふべし。国のため、君のために、止むことを得ずして為すべき事多し。その余りの暇、幾ばくならず。思ふべし、人の身に止むことを得ずして営む所、第一に食物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三つには過ぎず。饑えず、寒からず、風雨に侵されずして、閑かに過すを楽しむとす。たゞし、人皆病あり。病に冒されぬれば、その愁忍び難し。医療を忘るべからず。薬を加へて、四つの事、求め得ざるを貧しとす。この四つ、欠けざるを富めりとす。この四つの外を求め営むを奢りとす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。

第二二三段の「医療を忘るべからず」は、『徒然草』第二二七段大福長者の五箇条にはなかった項目である。『永代蔵』では、隠遁者や静かに生活を送る人物は登場しないが、『徒然草』第二二三段の「医療を忘るべからず」について『永代蔵』に同項目があるかどうかを確認したい。『永代蔵』にある健康という財産については、以下①から④が該当する。

①巻一の一「福德は其身ふくとく そのみの堅固けんこに有」

②巻二の一「第一人間堅固げんけんこなるが身を過すくる元なり」

③巻三の一「△達者たつしや七両」



④卷六の五「人は堅固<sup>けんこ</sup>にて其ふんざいさいおうに世をわたるは大福<sup>ふく</sup>長者にもなほまさりぬ」

以上により、西鶴の考える人生の幸せの要素には、金銀や出世だけではなく、健康を優先し、子孫繁栄と長生きをするという項目も含まれている可能性を見いだした。これにより、『徒然草』第一二三段の兼好の思想と共通する項目が『永代蔵』にも存在することを推測するものである。

(4)『徒然草』の思想を基に西鶴が想像した理想

『徒然草』第二二七段と『徒然草』第二二三段の存在が『永代蔵』へどのような影響を及ぼしたのかを考察した。西鶴は『徒然草』第二二七段にどのような見解・意義を持ったのかのひとつの手がかりとして、何度か引例に用いた「A. 人間常住の思ひに住して、かりにも無常を觀<sup>み</sup>ずる事なかれ」について、再び注目する。『永代蔵』卷五の二に「惣<sup>そう</sup>じて掛<sup>かけ</sup>乞<sup>ぎ</sup>の無常<sup>むじやう</sup>を觀<sup>み</sup>ずる事なかれ」という文言があり、「A. 人間常住の思ひに住して、かりにも無常を觀<sup>み</sup>ずる事なかれ」と同一かという問題がある。しかし、『徒然草』第二二七段では、「人間界のことは永久に不変であるという考えを堅持して、かりそめにもこの世は無常なものと觀念することがあつてはならない」という意であり、一方の『永代蔵』卷五の二は、「借金取りが仏心を起こしてはならない」の意である。使用している語は似ているが、意味は全く異なる。

また、『西鶴織留』（元禄七年刊）卷二の五でも、「福德<sup>ふとく</sup>祈<sup>いの</sup>る商人<sup>あきんど</sup>の家に世の無常<sup>むじやう</sup>を觀<sup>み</sup>じ人のなげきにかまふ事なかれ」と『徒然草』第二二七段に類似する文言がある。しかし、この章段の中で「世の無常を觀<sup>み</sup>じ、人のなげきにかまふ事なかれ」は活かされていない。これについて野間光辰氏は「無常を觀<sup>み</sup>じ人のなげきにかまふ事なかれ」について、「町人社会に底流せらる反宗教的・唯物的解釈の代表的な文章である」として<sup>(21)</sup>いる。さらに、「上文「世の無常を觀<sup>み</sup>じ、人のなげきにかまふ事なかれ」を受けて、商口の偽りを肯定しているが、下文の小川屋の話は慈悲・正直で成功した例。このところに前後矛盾が見られる」と述べている。このことから、西鶴は、『徒然草』第二二七段の「A. 人間常住の思ひに住して、

かりにも無常を觀する事なかれ」については、作品を形象化する際に苦心していた可能性がある。『永代蔵』以降の作品である『西鶴織留』巻二の五で再度取入れを試みて、うまく対処しきれないところからも、苦心の跡を窺うことができる。『永代蔵』巻四の四「欲でかためし人もおろかなる物ぞかし」にあるように、長者になりたい、金銀を溜めたいという欲求心と精神・外見・物欲のすべてを始末のために抑えよと教訓することは、本来矛盾した主張である。ただし、もしこの西鶴の苦心が『徒然草』第二一七段の兼好の「抑人は、所願を成ぜんがために財をもとむ……」（前記引用文より以降）に続く批判に反映されたものと解釈するならば、『永代蔵』の表現は大福長者の五箇条に沿っているものの、西鶴自身はあえて兼好の主張を意識しながらも、それを当世の現実に変換させていると考えることができる。

大福長者の五箇条を概ね参考にしていたことは間違いないと考える。しかし、大福長者の意見がすべてではなく、現実社会には本音と建前があり、『永代蔵』巻一の一で披露した「然りといえども」「ひそかに思ふに」と思考を裏表と転がす事こそが西鶴のしている「今そこにある、ありのままの現実」ではないであろうか。

次に『徒然草』第二一七段と一二三段から得た現実を、西鶴が理想の生き方へと展開させた例を以下に記載する。

①巻三の一「人若時貯して年寄ての施肝要也。拙も向へは持て行ずなふてならぬ物は銀の世の中」  
わかい たくはへより ほごしかんよう とて さきもち

②巻四の一「此人数多の手代を置いて諸事さばかせ其身は楽を極めわかひ時の辛勞を取かへしぬ。是ぞ人間の身のもちやうなり（中略）人は十三才迄はわきまへなくそれより廿四五までは親のさしづをうけ其後は我と世をかせぎ四十五迄に一生の家をかため遊樂する事に極まれり」  
あまた てだいをき しょじ み たのしみ きは いたのしみ しんろう まで いく ちゅうく せい

③巻四の五「若時心をくだき身を働き老の楽みはやく知べし」  
はたら くる たのしみ しる

右の①から③は、若い時には儉約・勤労に励み、長生きをして、老いては楽しめというものである。『徒然草』第二一七段の「何をかたのしひとせん（前記引用文傍線部c）」にある兼好の問いかけに対して感化された西鶴なりの答えではなかったであろうか。ほかにも『徒然草』第七四段には「みをやしなひて何事をかまつ。期する所。只、老と死とに有。

其来る事すみやかにして。念々の間にと、まらず。是をまつあひだ、何のたのしびかあらん。まどへるものは是ををそれず。名利ミヤカリにおぼれて。先途ゼントのちかきことをかへりみねば也。をろかなる人はまた。是をかなしぶ。常住ならんことをおもひて。変化の理をしらねば也」がある。大福長者の五箇条と兼好の価値観を合わせた先の「老いてからの遊興」こそが「たのしび」であり、西鶴が新たに構築した思考を反映させたものが『永代蔵』であると推測するものである。西鶴が『永代蔵』の中で、人として進むべき道を描写するにあたって、現実にあると西鶴が感じた事柄を既製の常識にとらわれず、生々しい巷説や伝聞を様々織り混せて、新たに練り直したものであると考えるものである。

『永代蔵』は、『徒然草』の大福長者の五箇条と兼好の価値観を相反する状態のまま双方を取り入れ、さらに西鶴が新しく再構成を加えて、人生の幸せは金銀と健康を併せ持つことであるという思想を表現した作品であることを推察する。

#### 四 おわりに

本稿では、『永代蔵』における『徒然草』の受容と内容反映の具体例を示すことで、本作品の主題を探る手がかりとして『徒然草』本体の意味するところと、西鶴が感得したであろう思想を吟味し、逐次検証することを考察目的とした。

「二」『永代蔵』における『徒然草』の受容」では、近世における『徒然草』の受容史を通して、『永代蔵』刊行当時、『金儲け教訓書』の関心が高かったことや『永代蔵』の副題「大福新長者教」の解釈も含めて、『長者教』単体の書だけではなく、多数の長者教訓書と『徒然草』の影響を受けている可能性を推察した。

「三」『永代蔵』における『徒然草』内容反映の具体例」では、『永代蔵』が『徒然草』の何を根底として起筆されたもののかを探るために、『徒然草』と『永代蔵』の関連について具体例を挙げて考察した。『永代蔵』刊行当時に『徒然草』がどのように解釈されているのか『徒然草』注釈書と『永代蔵』を比較することで、西鶴は読者に対し、わかりやす

い物語へと変化させたのではないかと推察した。また、西鶴が『徒然草』第二一七段に対して、単に本文の注釈を目的とはしていない根拠として、物語の中に一般生活に密着した現実を取り込んだと推測される事例を考察した。さらに、西鶴の考える人生の幸せの要素には、金銀や出世だけではなく、健康を優先し、子孫繁栄と長生きをするという項目も含まれている可能性を見いだした。

『徒然草』が注釈書から教訓書、模倣書と需要の変化の中で、西鶴はこれまでの注釈者が抱いた以上の内容を感じたと考える。教訓ではなく、人生の幸せとは何かを探索する精神を世に広めるため、日常にありそうな伝聞形式の挿話を混合し、「金銀と健康どちらにも偏ることなく持つことが大事である」という新しい方向性を見いだしたと推察する。

最後に、本稿では『永代蔵』における『徒然草』の受容と内容反映の具体例を明らかにすることで、『徒然草』は『永代蔵』の思想に関わる内面的な素材であることを推察した。しかし、『永代蔵』は人気の作品であるといわれながら、『永代蔵』の名前を冠した作品は、浮世草子では北条団水作『日本新永代蔵』のみである。人気作品といえば『好色一代男』があるが、『好色一代男』刊行後、西鶴以外の作品に『好色』と冠することが流行した。これを人気の指標と考えるとき、『永代蔵』が人気作品とされる箇所は何であったのか。これについては今後、稿を改めて考察を試みたいと考えている。

## 注

- (1) 『永代蔵』の書誌と概要は、村田穆氏執筆「日本永代蔵」(『日本古典文学大辞典』第四卷 岩波書店)と野間光辰氏監修『西鶴』(一九六五年 天理図書館)の項目を参照している。
  - (2) 中村幸彦氏「徒然草受容史」(『国文学 解釈と鑑賞』二二卷十二号 一九五七年十二月、のち『中村幸彦著述集3』一九八三年 中央公論社 所収)
  - (3) 関場武氏「徒然草の影響・享受と研究史―近世前期を中心に―」(『国文学 解釈と鑑賞』三五卷三号 一九七〇年三月)
- 徒然草に需要要因について、「徒然草は近世の前期を通じて、ほぼ現実的教訓の書として解釈され享受されてきた。とらえ方

は、1 仏教的見地よりするもの、2 儒教的見地よりするもの、3 文学的見地よりするもの」とある。

(4) 檜谷昭彦氏「徒然草の享受史」(言語・源泉・影響) 四卷一九七四年十一月)

徒然草に需要要因について、「近世初頭の徒然草享受の様相を考えると、そこには注釈書の学問的見地よりする教訓的色彩が注釈の表面を覆っている」とある。

(5) 島内裕子氏「近世初頭における徒然草の受容」(『国語と国文学』六六卷四号一九八九年四月)

徒然草に需要要因について、「近世初頭のこのようないわゆる文学的作品以外の教訓書・思想書の中で、彼らの思考の論拠や思想の代弁となりうる書物として、徒然草が古典作品の中からとらえ直されてゆくのである」とある。

(6) 吉江久弥氏「西鶴と『徒然草』——『日本永代蔵』の性格をめぐって」(『仏教大学研究紀要』五四卷一九七〇年三月、のち『西鶴 人ごころの文学』一九八八年 和泉書院 所収)

(7) 佐伯友紀子氏「西鶴独吟百韻自註絵巻」における『徒然草』享受の再検討」(『表現技術研究』四卷二〇〇八年三月)

「独吟百韻」中に見られる『徒然草』の用例における考察について、「西鶴が『徒然草』本文を熟知していたというよりは、章段内の象徴的な語句や表現を定型句のように使用していたことの表れであり、それが西鶴の古典享受のありようだ」と論じている。

(8) 広嶋進氏「『世の人心』と『徒然草』」(『西鶴探求——町人物の世界——』二〇〇四年 ぺりかん社)

西鶴の『世の人心』と『徒然草』の関係について、「『世の人心』において、特に移ろい易い『人心』を多く記すのは、『徒然草』の『心』の認識に影響を受けている可能性がある」ということを論じている。

(9) 谷脇理史氏「『徒然草』と西鶴の町人物」(『新典社研究証書』二二二『近世文芸への視座——西鶴を軸として——』一九九九年十一月 新典社 初出『東書国語』二二二号・二二三号一九八三年十月)

西鶴の町人物と『徒然草』との対応について、「中世の世の姿や人の心の有り様をとらえる『徒然』から、今の世の姿や人の心の有り様をとらえる姿勢を受けついでいる」と論じている。

(10) 一例として、広嶋進氏「『日本永代蔵』における『大福』と諸章の変容——成立の問題をめぐって——」(『近世文藝』六三卷一九九六年一月)では、「『大福新長者教』という副題は、巻一の二、巻二の一、巻三の一などが『長者教』をふまえた形式をもつ」と述べている。

(11) 野間光辰氏「『長者教』考」(『西鶴新攷』所収一九四八年 筑摩書房、『西鶴新攷』岩波書店には所収していない。初出『国語国文』八卷四号一九三八年四月)。

『徒然草』と『長者教』の関係について、「従来の物品貨幣に取って代わつて、金属貨幣が交換の媒介として市場に重きを成しつゝ、あつた中世以後に於て、既に『徒然草』の第二十七段「ある大福長者のいはく」の一章に萌芽として示されたやうなものが、佛教的倫理を背景とし、佛教的説話によつて潤色敷衍されて、獨立した一篇の『長者教』の形をとつて行はれるやうになり、それが轉々書寫せらるゝ過程に於て、雑多な教訓的狂歌・禁句が附加せられて、『爲愚癡物語』所載の如きものとなり、最後に寛永『長者教』となつたものであらう」と述べている。

(12) 以下『徒然草』の本文引用は、吉澤貞人氏『徒然草古注釈集成』（一九九六年 勉誠社）による。

(13) 『徒然草寿命院抄』の本文引用は、吉澤貞人氏『徒然草古注釈集成』（一九九六年 勉誠社）による。

(14) 『桮榼』の本文引用は、吉澤貞人氏『徒然草古注釈集成』（一九九六年 勉誠社）による。

(15) 『なくさみ草』の本文引用は、吉澤貞人氏『徒然草古注釈集成』（一九九六年 勉誠社）による。

(16) 『徒然草文段抄』の本文引用は、『徒然草文段抄』下（『北村季吟古注釈集成』十九 新典社）を私に翻刻した。

(17) 『増補鉄槌』の本文引用は、新潟大学附属図書館蔵（佐野文庫 六冊）の紙焼き資料を私に翻刻した。

(18) 以下『徒然草』口訳は、安良岡康作氏『徒然草全注釈』（『日本古典評釈・全注釈叢書』一九六九年 角川書店）による。

(19) 以下『永代蔵』の本文引用は、『定本西鶴全集』第七卷（一九五〇年 中央公論社）による。

(20) 谷協理史氏『日本永代蔵』巻頭の一節をめぐって（『西鶴研究序説』一九八一年 新典社所収）、『古文真宝後集』所収の王元之「待漏院記」、程正叔「視箴」、李白「春夜宴桃李園序」を引用して、「いわば「古文真宝」に構えて」もっともらしく表現しておもしろさを生んでいる」と述べている。

(21) 野間光辰氏ら編『西鶴織留』頭注（『定本西鶴全集』第七卷 一九五〇年 中央公論社）による。

(22) 野間光辰氏校注『西鶴織留』頭注（『日本古典文学大系』四八「西鶴集下」所収 一九六〇年 岩波書店）による。

(23) 『徒然草』の本文引用は、注（12）に同じ、ただし私に濁点・句読点を施した。

〔付記〕 本稿をなすにあたり、石川了先生、江本裕先生には懇切なご指導を賜りました。ここに記して篤く御礼申し上げます。